

海員時事

千足耕一 (東京海洋大学海洋政策文化学科・教授)

海(海洋)の教育

海洋教育と海洋基本法

日本においては2007年に海洋基本法が、2008年には海洋基本計画が施行され、海洋の持続可能な開発や利用について求められていることが法律で定められました。特に海洋基本法の第28条に示されている「海洋に関する国民の理解の増進等」においては、学校教育及び社会教育における海洋教育の推進が謳われています。

海洋教育とは何かを調べると、海洋教育とは「船、水産物、海洋そのもの、海軍、防衛に関する教育」であると述べられています。また、明治期からの海洋教育は、商船教育、水産教育、海上保安に関する教育、無線通信に関する教育、防衛に関する教育の5つであると書かれています。これまでの海洋教育は職業人の養成を主眼として展開されてきたのですが、上記のような法律や社会的な背景のもと、人々の海に対する知識や理解の向上を図り、海との共生についてその積極的な関心を喚起するための海洋に関する教育・啓発、特に青少年に対する海洋教育の拡充

が課題であると述べられています。

海と日本人の関係

海と日本人の関係を振り返ると、海からの食糧供給によって、沿岸地域に多く人が住むことが可能となり、漁業を中心とした産業(漁撈文化)が海辺の街を形成してきました。また、海や河川は舟艇を用いた交易(海運文化)のための場でもあり、日本各地に港街が形成され、発展してきました。また、日本においては、海によって他国と隔絶された地勢から、他国から守るための国防・防衛の役割(海軍文化)を果たしてきた地域があります。これらは、海を産業の場としてみる立場ですが、海の信仰や海の芸術、海での体験活動(海洋芸術文化)は、海沿いに住む人々における、海と人とのかわりの土台となっていると考えてよいと考えられます。

探求型の学習

2014年6月、海洋観光の振興

に関する検討会による「海洋観光の振興に向けての最終とりまとめ」においても、若者の海離れや海が果たしてきた役割を十分に認識していないのではないかといった懸念から、海に関する体験活動の場の創出や、教育旅行等の取り組みを推進する方向性が示されています。

海辺の体験活動は、なぜ必要なのでしょう。海辺の体験活動は、海辺で、海辺の文化や自然を活用して行う各種活動であり、野外活動、自然・環境学習活動、文化・芸術活動、漁業体験等の第一次産業体験などを含んだ総合的な活動です。これらの活動を実施することによる、直接的な体験からの学びが期待されています。直接的な体験からの学びは、指導者による一方的な知識等の伝達ではなく、学習者自身が自ら気づき、



学び、行動につなげていくといったことがらを重視しています。これは「探求型の学習」（課題発見・解決型の学習）として説明されます。

海辺は不思議に満ちた世界であり、学習者が興味を持つ題材にあふれています。また、海が私たちに多くの恩恵を与えてくれることを理解したり、私たちが自然の一部として生きていることを体感させてくれたりする場でもあります。海辺という自然の中での直接的な体験を通して、自然やそのつながりの理解、社会性を促す他者との調和的なかわり、健全な心身の育成に通じる全人教育がなされることが期待されています。



学校教育の取り組み

これまでも多くの海洋・海事関係団体、大学、研究機関、NPO等（例えば日本海洋少年団、B&G海洋クラブ、など）が海洋に関する教育活動を行ってきましたが、近年では海の活動に参加する人が減少傾向にあるとも言われています。海洋教育を実施しようとする場合に、安全管理の問題、時間の問題、場所の問題、指導者の問題など、様々な障壁があります。制度の問題では、学習指導要領の中に海に関する記述が少ないことや、学校教員の業務が多忙すぎて海の教育にまで手が回らないなどがあげられます。管理責任を問われる活動には手が出しにくい等の問題点もあります。これらの障壁もあり、学校教育の中に「海洋」に関する教育が浸透しているとは言えません。

海に関する教育を学校教育に取り入れていくためにも、教育関係者や学校関係者に海洋教育の意義と重要性を理解してもらうことが必要です。この他、地域が一体となって子どもたちを育成するという視点や、スポーツ団体・教育機関・行政など官民一体となったネットワークづくりをおこなっていく必要があるでしょう。

自然に対するセンサー

わたしたちの生きている現代は、経済発展やライフスタイルの変化に伴い、快適にコントロールされた環境に身を置くような生活が浸透してきています。またゲームなどに代表されるような、ヴァーチャル空間があふれています。コントロールされた環境に慣れてしまうことは、わたしたちの自然に対する危機感や自然に対するセンサーを鈍らせてしまうことにもつながります。ヴァーチャル空間での経験しか持っていないければ、現実の社会で通用するような適応能力や行動力を持つことが難しいと思われれます。

自然の中で生きる

海水面の温度上昇、気象の変化、水産資源の減少など、私たちの直面する海にまつわる課題は非常に多くなってきました。このような事実について、頭の中では理解されている一方で、具体的な対処方法を各自が実践するまでには至っていないように思われます。リアルな感覚を取り戻すために、海に目を向け、海と親しみ、海との正しい付き合い方を学ぶことこそが、これからの日本人

の課題でもあります。

海辺で活動することで、海から陸地や地球全体に目を向ける視点を持ち、海に対するセンサーを敏感にさせることは、自然の中で生きる緊張感や現実感を持ちながら暮らしていくことにつながります。海辺での体験活動を通して、海と賢くつきあう方法を子孫に伝えていく教育が、今こそわれわれに求められているのではないのでしょうか。

千足耕一 プロフィール

1966年4月神戸市生まれ。東京海洋大学海洋政策文化学科・教授。専門分野・海洋スポーツ、海洋性レクリエーション。1989年筑波大学体育専門学群卒、1992年同大学院修了、2003年学位取得（博士・医学・東邦大学）。筑波大学体育センター、十文字学園女子短期大学、鹿屋体育大学海洋スポーツセンターを経て現職。日本海洋人間学会、日本野外教育学会、海に学ぶ体験活動協議会等の理事も務める。著書に「水辺の野外教育」（杏林書院）や「スキング・ダイビング・セーフティ」（成山堂）他。海辺の労働や身体活動に関する研究活動（論文執筆や科研究費による調査活動）を継続的に実施しつつ、大学での教育活動を実施している。